日本古典全書

更級日記

監修　佐佐木信綱　新村出　津田左右吉
辻善之助　山田孝雄　和辻哲郎

更級日記

玉井幸助校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書
「更級日記」　玉井幸助校註
昭和二十五年二月二十五日初版發行
昭和三十年九月三十日第三版發行
印刷所　株式會社東和印刷
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・小倉市砂津・名古屋市廣小路）
定價　一八〇圓

目次

解説

更級日記の背景……三
作者の血統……一三
菅原孝標の女……一九
更級日記梗概……三五
更級日記の錯簡と傳本……四八
略年表……六四
系圖……六八

凡例……六九

本文

一 東海道旅行記……七一
一 あづまぢのはて……七五
二 かどで……八〇
三 下総の旅……八三
四 武蔵の旅
五 相模の旅
六 駿河の旅

七　遠江の旅……八六
八　三河の旅……八七
九　尾張の旅……八八
一〇　美濃の旅……八八
一一　近江の旅……八九
一二　京に入る……九〇

二　家居の記……九二

一三　三條の宮の西なるすまひ……九二
一四　繼母の離別……九三
一五　乳母の死……九四
一六　侍從大納言の御女……九五
一七　をばのたまもの……九六
一八　花たちばな……九八
一九　宿のもみぢ……九八
二〇　六角堂のやりみづ……九九
二一　つちいみ……一〇〇
二二　あやしの猫……一〇一
二三　長恨歌のものがたり……一〇三
二四　荻の葉……一〇四
二五　火の事……一〇五
二六　せばき宿……一〇六
二七　姉の死……一〇六
二八　かばねたづぬる宮……一〇七
二九　姉をいたむ歌……一〇八
三〇　吉野の尼君……一一〇
三一　つかさめしの朝……一〇一
三二　東山の宿……一一一
三三　京にかへる……一一六
三四　もとの宿……一一六
三五　旅なる宿……一一七
三六　木のまろが名のり……一一八
三七　あらましごと……一一九
三八　父の任官……一一〇
三九　父の出立……一二二
四〇　太秦ごもり……一二三
四一　荻のかれは……一二四
四二　こしのびの森……一二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

四三　清水ごもり……一三六
四四　鏡のかげ……一三七
四五　天照御神……一三九
四六　修學院の尼……一三〇
四七　父の歸京……一三一
四八　里とほき宿……一三三

三　宮仕への記……一三四

四九　きこしめすゆかりある所……一三四
五〇　なれぬつとめ……一三五
五一　里にくだる……一三七
五二　前世のゆめ……一三八
五三　宮の御佛名……一三九
五四　水の田ぜり……一四〇
五五　まめ心……一四一
五六　梅壺の女御……一四三
五七　冬の一夜……一四四
五八　水のうきね……一四五
五九　しののをすすき……一四六
六〇　春秋のさだめ……一四六

四　結婚以後の記……一五五

六一　石山詣で……一五五
六二　初瀬詣で……一五七
六三　鞍馬詣で……一六〇
六四　再び石山詣で……一六五
六五　再び初瀬詣で……一六六
六六　世ののぞみ……一六七
六七　白山の雪……一六八
六八　西山のおく……一六九
六九　再び太秦ごもり……一七〇
七〇　あらいそなみ……一七〇
七一　西へゆく月……一七一
七二　和泉くだり……一七二
七三　夫の任國……一七五
七四　人だま……一七六

七五　夫の死去……一七六
七六　悲しきかげ……一七九
七七　後のたのみ……一八〇
七八　をばすての宿……一八一
七九　ひまなき涙……一八二
八〇　よもぎが露……一八三

更級日記

玉井幸助

解　説

一、更級日記の背景

更級日記は、九百年前の一女性が、自分の一生を書きとめておいた私的記錄である。少女時代、文學にあこがれ、妻として、夫の出世に望みをかけ、母として、子供の前途に心を碎き、晩年、孤獨の生活に入つてからは、遙かに彌陀の淨土を思慕して、心の窓から常寂の光を仰いだ。その一生には山もなく谷もなく何等の奇もない。こんな平凡な記錄が、古い時代の私小說と呼ばれて、今のわれらを引きつけるのは何の力によるのであらう。それはその文章が極めて自然で、愛すべき一種の味を持つからである。文章の味といへば技巧上のもの、藝の力によるものと考へられるのであるが、すべての魅力ある作品がさうであるやうに、更級日記の文章も藝や技巧を超越してゐる。そこには、文章といふものはなく、ただ夢を追うて永遠に旅する一人の女性が髣髴と現はれてゐる。

私は、更級日記を映画にしてみたら、定めし面白いものが出來るだらうと思ふのであるが、それはとにかく、昔は映画の代りに繪卷といふものがあつて、源氏物語や保元平治の合戰記や、そのほかいろいろの

小説類が、巻物といふフィルムの上に、美しい天然色映画を描き出したものである。更級日記も、もとよりその中にあつた。しかも更級日記は、映画全盛のこのごろになつて、最近某氏の企てにより、公文蘆淵氏繪、千葉胤明氏詞書の繪卷が新らしく製作せられた。あたかも「ある女の一生」とでもいふやうなタイトルで、更級日記が新らしく上映せられたやうなものであるが、さて實際の映画化といふことは、まづさしあたり望めないであらう。せめて心の銀幕に映して、この一女性の生きた姿を、ありありと眺めて見たいものである。

更級日記の作者は、「人の世」といふ無限につづく連鎖劇を、五十年間舞臺に立つて何の奇もない一卷を眞劍に演じて、九百年前に死んでしまつた。しかし彼女はそれきり消えてしまつたのであらうか。その命は、前後に何の關係もなく、ある期間偶然そこに存在して、それきり無くなつたのであらうか。明滅する個々の生命の悠久なる連續に對して、私は不思議な親愛を感ぜずにはゐられない。

私はこのごろ、當歳の孫が獨り遊びをしてゐるのをじつと見ながら、自分が再び生まれ變つて出て來たやうな錯覺を感じることがある。青い空や動く木の葉に、物珍らしさの目を見張る孫の姿は、ありし日の私の姿、手を振り腰を浮かせて、何ごとをか叫びつつ立ちあがらんとする孫の心は、ありし日の私の心、そのありし日は今につながり、孫は私につながつて、そこにはただ一つの生命が、新らしく生きようとする衝動を感じるのである。もちろん、それは一時の錯覺に過ぎない。ありし日は嚴然として、ありし日で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

あり、孫は正しく孫であつて私ではない。そのありし日の空には鳶が舞つてゐた。今はアメリカの飛行機が飛んでゐる。

更級日記の作者が生きてゐたのは、ありし昔の遠い世である。命は同じ命ながら、世は雲泥の相違である。そこに生きたその人の姿を、今この心に映さうとすれば、その時代を背景に置かなければならぬ。

平安時代四百年、わが更級日記の作者が生まれたのは、その前半の二百年も過ぎ去つて、正に爛熟した平安文化を我が身の榮華に代表した御堂關白道長の全盛期である。卽ち一條天皇の寬弘五年に生まれ、三條・後一條・後朱雀の御代も過ぎて、後冷泉天皇の康平二年に五十二歲、そのころ、わが身の一生を回想して書いたのが更級日記である。

清少納言・和泉式部・赤染衞門・紫式部などは、いづれもその先輩であつて、更級日記作者の青年期には、おほかた世を去つてしまつた。道長と行成とが同じ年に薨じた萬壽四年に彼女は二十歲であつた。道長の後をついだ賴通は宇治に平等院を修築し鳳凰堂を建立し、一代の名工定朝はそれらの爲になほ佛像を刻んでゐたが、前代の榮華を代表する法成寺は燒けて再び建たなかつた。藤原氏の全盛も絕頂を越えて、平安的なるものが次第に傾き、今まで底深く流れてゐた新らしい力が現はれ始める。文壇においても堤中納言物語の如きが現はれたのは、更級日記の作者がやや老境に入つたころである。

平安時代の初期百年間は遣唐使や學問僧の派遣があつて、大陸文化の輸入が盛んに行はれ、文學も漢詩

漢文が專ら重んじられたのであるが、宇多天皇の寛平六年に菅原道眞の獻策によつて遣唐使が廢せられ、今までに輸入した海外文化を靜かに消化して、新らしく日本的なものを作り出さうとする氣運に向つた。和歌が再び文壇に重きを置かれるやうになつたのもこのころからであり、紀貫之が假名文の製作に力を用ひたのもこのころである。その假名文は女流の手に承けつがれて物語文學という空前の花を咲かせた。更級日記の作者は物語文學の絶頂期に生まれて、その香り高い雰圍氣の中で育てられた。

ここに作者の幼女時代を想像して見よう。作者は、あまりゆたかでない中流家庭に生まれて、「平安時代」という言葉の持つ花やかさからは、かなりかけはなれた實生活の中で成長したと思はれる。さういふ點では彼女の先輩である清少納言や紫式部も同じである。上流貴族といはれる階級は藤原氏の宗家に獨占せられ、その他の家々、及び藤原氏でも末流の者は、それぞれ傳統的な家格に從つて、代々その身分相應の生活に甘んじてゐたのである。

菅原道眞は更級日記作者の父孝標をさかのぼる五世の祖であるが、その道眞は藤原時平と並んで右大臣の地位に卽いた人である。それから百年を經過した今は、家の階級が固定してしまつて、孝標は道長や賴通の私邸に出入することによつて、たまたま地方官に任じられるのを喜びとするやうな地位に置かれたのであるが、世もこれを怪しまず自らもそれに滿足してゐた。つまり藤原氏を中心とする階級的組織によつて世の中は一應安定の狀態を保ち、その安定の中で平安文化は育てられた。平安文化の特質は感情の滿足

であり美的生活の追求であるが、それをわが身に實現し得たのは上流貴族であり、中流は僅かにこれを模倣し或はその餘光の中に生活し、そして下衆はそれにあづからぬのである。しかも、さうした美的生活が營まれたのは、主として平安城内、即ち京都に於けることであつて、地方は、かけはなれて淋しいものであつた。その故に平安文化は、都に於ける、しかも貴族社會のみの所有であつたと考へられる傾きがある。しかしさういふ考へ方は誤りであり、それはやはり、當時の全日本と全民衆との共有した文化なのである。ただ貴族は文化といふ劇の實演者であり、民衆は觀客であつたと言つてよからう。遠隔の地に觀覽席を持つ地方人は、清少納言が言つたやうに、都からの便りによつて「世にあること」を聞いて心を慰めることが出來たし、また都に近い國々に住む者ならば、京都に花やかな催しでもあれば、「水の流るるやうに」都のうちへ集まつて來て、目を樂しませることも出來たのである。下衆の中の下衆である乞食尼でさへ、皇后樣の御住みあそばす職の御曹司の御庭に入つて來て、歌を謠つたり踊つたりすることの許されてゐたこの時代は、人間性の尊重が今日以上に認められ、世にある文化は、その者に適應した形に於て一般民衆が享受し得たのである。

何よりも現世の享樂が第一であつた當時の人々にとつては、精神界を支配するはずの宗教さへ、この世の歡樂を滿たす爲の用具であつた。賀茂祭の行列は、移動美術展覽會として一般民衆の目を喜ばせ、宮中で執り行はれた五節の行事は、舞姫によつて天女がこの世に天降り、小忌の公達によつて神の世界の清淨

美を顯現させるのであつた。それは一般には公開されなかつたけれども、見ぬ人の爲には日記も書かれ、噂話も世に傳はつて、人々にゆかしさの情を味ははせた。

佛教は比叡山の天台宗、高野山の眞言宗が國家的の二大宗派として重んぜられ、ややおくれて天台の高僧源信によつて說かれた淨土教が道長時代には最も强く人心を支配したのであるが、その何れも、佛教本來の目的である出家思想とはかけ離れて、むしろ人生執着の意欲を滿たす具に供せられた。哲理的研究を主とする天台宗には、十二年の山籠りといふやうな出家修行もあつたが、それも才幹ある人物が門閥によつて塞がれた出世の道を切り開くための關門であり、僧都・僧正ともなつて、「佛の現はれ給へるにこそ」と世の人に敬はれるのが目的であつた。行法によつて卽身成佛の心境に入らんとする眞言宗の徒は、徒らに加持祈禱を振りまはして、この世の災難を退散せしめるといふ、いはゆる驗者になりすまして、流行病でもある時には、醫者よりも忙しく走り廻らねばならなかつた。厭離穢土・欣求淨土を思念する淨土宗は、この世を厭離するのではなく、この世に淨土を顯現しようとする意欲の方に向つて行つた。忠平の法性寺・道長の法成寺・賴通の平等院など、いづれも極樂淨土をこの世に現はさうとしたのであり、そこで施行せられた佛事は、音樂や繪畫や佛殿の裝飾や、燦爛たる法服を纏うた僧侶、競うて美裝をこらした男女貴族の見世物的集會、つまり大きな綜合美術展覽會ともいふべきものであつた。

かうした美的生活の樣々な形は、物語や日記に書かれて、それを直接見ぬ人の心をも樂しませたのであ

るが、まだ印刷術の無かつた時代のことであるから、さういふ本が廣く流布することは無かつた。紫式部日記を見ると、中宮がおほぜいの女房たちに命じなされて、かなり大がかりな草子作りを、おさせになつたことが書いてあるが、かうした出版製本の家庭的作業は、必ずしも高貴なあたりだけで行はれたのではなく、廣く各家で營まれたことは言ふまでもない。しかし、何と言つても寫本によるのであるから、本が地方にまで行きわたるといふことは、まづ無かつた。だから一般民衆は聞き傳へ語り傳へて、ゆかしさの心を滿足させることによつて、その世の文化を享受するといふ在り方であつた。

更級日記の作者は、十歳の時、父に伴なはれて上總の國に下つた。父孝標は四十五歳で初めて上總介といふ一地方官の位置を得たのである。和名抄によると、京都から上總の國府までの行程は、上り三十日、下り十五日と記されてゐる。これは當時における公の規定なのであらう。しかし更級日記によれば、孝標が歸京した時には全部で九十日ほどの日數を要してゐる。當時の旅行がいかに難儀なものであつたかが想像せられるわけであり、かうした交通の不便が、都會と地方を隔離してゐたことも想像せられる。だからといつて、地方の生活が全然文化に觸れない未開狀態にあつたやうに考へたならば大きな誤りである。奈良時代から國々に置かれた國分寺は地方文化の中心となつてゐた。更級日記の作者が、上總で等身の藥師如來を刻んでもらつたのも、おそらくその國の國分寺に屬してゐた佛師であらう。それに、どこの地方にも都から下つて來た豪族があり、都における貴族の莊園を支配する家々もあつて、それらは都會の文化を移

入すると共に、その地方の生活に適した地方文化の建設を負ふ大きな勢力として存在してゐた。孝標が赴任した上總地方には、平安時代の初期に上總介に任じられた平高望の子孫が私田を貯へて門戸を張つてゐた。承平年間にこの地方で亂を起し、宮殿を構築して自ら新皇と稱した平將門は高望の孫であつた。將門の亂は更級日記の時代より百年も前のことであるが、その頃からもう地方豪族の勢力は大きなものになつてゐて、たまたま都から赴任して來た國司などを、文化人として尊敬する風は薄らいでゐた。もつとも、國司が敏腕家であれば、これらの豪族と結托して自ら又新らしく地方に地盤を築くのであるが、菅原孝標のやうな好人物の國司は、在任中たゑず周圍に氣を使つて、言ひたいことも言はずに小さくなつてゐるやうな有樣であつた。將門記には武藏の國足立の郡司判官代武藏武芝といふ者が、國司興世王と爭つたことが見え、更級日記には竹芝の莊の傳說が記されてゐる。兩者の間には何等かの關係があるらしく思はれるが、それはとにかくとして、地方文化の開發が既に久しい以前からのものであつたことは、これによつても知られるのである。だから地方にも豪奢な生活はあつた。ただ前にも言つたやうに、書物の普及といふことが無かつたから、更級日記の作者のやうな文學少女にとつては、都の空にあこがれる情は烈しいものであつたであらう。だがそれは、今日とても同じである。

更級日記の作者は四年間田舍で暮して、寬仁二年の年の暮に、あこがれの都に歸つた。歸つて見れば、都といつても宮殿のみが立ち並んでゐるわけではない。彼女が到着して初めて住んだ家のあたりは、まる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.